

赤れんが通信



北海道庁の金昭賢(キム・ソヒョン)国際交流員が、韓国の友好地域との交流事業及び北海道の情報などについて書いたレポートをご紹介します。

窓の向こうから聞こえてくる軽快な笛の音と道路を埋め尽くした長い山車の行列、食欲をそそる屋台の食べ物の匂いと歯にしみるほど冷たくて甘いかき氷、浴衣姿でお面をかぶったまま街を歩く人の群れなど、去年より一層活気にあふれた札幌市内の雰囲気はいつもより異国的でした。今年の夏は4年ぶりに本格的に復活した様々なイベントがあって、外国に住んでいるということを改めて実感することができました。

2023 ソウル世界都市文化フェスティバル



ソウル市内の光化門(クァンファムン)広場及び清溪(チヨンゲ)広場一帯では、6月17日から2日間、ソウル特別市の親善友好都市の伝統公演やパレードなどを披露する「ソウル世界都市文化フェスティバル」が開催されました。

ソウル特別市と2010年10月に友好提携を締結して以来、訪問団の交流や公演団の派遣、友好図書総合寄贈など、様々な形の交流を続けてきた北海道からは今年、「乱拍子」公演団がイベントに参加し、獅子舞やアイヌ舞踊、和太鼓の演奏などを披露しました。

韓国食文化フェスティバル



8月1日、札幌パークホテルでは駐札幌大韓民国総領事館の主催で韓国の農産物や食品、伝統文化などを紹介する「韓国食文化フェスティバル」が開催されました。会場には慶尚南道、全羅南道、済州特別自治道など、韓国の自治体のプロモーションブースをはじめ、キムチとチャメ(果物)の試食やマッコリの試飲コーナー、伝統工芸品や韓国食材などを販売するブースなどが設けられ、多くの方々の関心の中、入場開始と同時に会場は賑わいを見せました。

この日は、韓国の伝統音楽公演、伝統菓子や伝統酒が味わえるセミナーなども開催され、韓国の伝統文化を身近に感じることができる時間になりました。キム・ソヒョン国際交流員は、韓国友好地域の概要や地域の特産品、郷土料理などを紹介するセミナーを2回行いました。

北海道庁のブースでは、韓国の友好提携地域を紹介する「韓国DAY」パネル展を開催したほか、各地域の観光PR動画や韓国料理のレシピ動画の上映、韓国のお箸を体験するミニゲームコーナーを実施しました。ブースの来場客は「鎮海(チネ)軍港祭、晋州(チンジュ)南江流灯祭りなど、地域の祭りに見に行きたい」、「韓国文化に憧れて普段から家で韓国の食器とお箸を使っている」など、様々な感想を話してくれました。

北海道ならではの風習

短い夏や降雪量が多くて長い冬のような北海道特有の気候のように、この地域では他の地域とは少し違う暮らし方が見られます。日常生活で見つけた北海道ならではの風習をご紹介します。

<七夕は8月7日！>

7月7日は、日本で「たなばた」と呼ばれる日として、全国各地でお祭りが開催されます。ほとんどの地域では新暦で七夕を行うので、6月末頃からは駅や商業施設など、人通りが多い場所に七夕飾りが飾られ始め、願い事を書く短冊を吊るせる竹が設置されます。しかし、北海道を含む一部の地方では8月7日に七夕を行います。



<七五三は10月！>

「七五三」は子どもの成長を祝う日本伝統行事です。11月15日になると、3歳・5歳になった男の子と3歳・7歳になった女の子が神社をお参りますが、北海道のような寒い地方では時期を早めて10月に行います。札幌市内では紅葉のシーズン(9月末)が訪れると、着物を着て神社や公園で写真撮影をする子供たちが多く見られます。

<大晦日に食べるおせち料理！>

おせち料理は海老(長寿)、昆布巻き(喜び)、ぶりの照り焼き(立身出世)など、縁起が良い食べ物を重箱に詰めたものです。一般的にはおせち料理を食べながら新年を祝いますが、北海道では一年を無事に過ごしたことを感謝し、年神様をお迎えするために大晦日におせち料理を食べる風習が残っているそうです。「口取り」というお菓子を食べるのも北海道特有の文化です。おせち料理の食材が手に入りやすかったのが、食材を象った和菓子を作るようになったのが起源だそうです。



韓国では元日に新年を祝い、旧暦の1月1日には健康や財運を祈る意味でトックク(お餅スープ)を食べる風習があります。また、その年の安泰と豊作を祈る茶礼(チャレ)という儀式を早朝から行い、お墓参りに行きます。



<節分には豆ではなく落花生！>

日本には2月初旬、疫病や悪鬼を追い払い、福を祈る「節分」という日があります。当日には家庭や神社で鬼に扮した人に豆を撒く行事を行いますが、北海道を含む一部の地方では「落花生」が使われます。その理由としては、落花生には殻が付いていて衛生的で、豆より拾いやすいこと、脂質が高いので体温維持に役立つことなど、諸説があります。



韓国では正月テボルム(旧暦1月15日)には殻の固いナッツ類(くるみ、栗、落花生など)を食べて1年間の無病息災を祈る風習があります。

<結婚式にはご祝儀ではなく、会費を！>

日本では結婚式が少人数で行われ、挙式が終わった後は夜まで二次会を開いてゲストと時間を過ごすことが多いようです。ご祝儀は3万円(約30万ウォン)からが一般的であり、ご祝儀袋の選び方や書き方、お金の入れ方や包み方まで守るべきマナーがあるとされます。しかし、北海道では招待されたゲストが会費を支払う文化が定着しているため、ご祝儀は出さなくても良いとされています。



韓国では白い封筒にお金を入れ、名前と所属を書いて出します。相場は最低5万ウォン(5千円)程度です。所要時間は約1時間で、通常200~300人余りのゲストが参加します。



熱気に満ちた地域のお祭り会場を訪ねて

地球温暖化の影響で全世界の気候が上昇しているだけに、今年には北海道の夏も蒸し暑かったです。日本では新型コロナウイルスが落ち着き、ここ数年間中断を余儀なくされたり、様々な制限の中で行われてきたイベントが今年からコロナ以前と同じように正常開催されることになりました。札幌では初夏を告げる6月の「YOSAKOI ソーラン祭り」や「北海道神宮例祭」を皮切りに7月の「花フェスタ」や「さっぽろ大通ビアガーデン」、「豊平川花火大会」など、多彩なイベントが開催されました。



▲演舞を披露する「YOSAKOI ソーラン祭り」の参加者たち

韓国では天気が涼しい春や秋にイベントが集中している傾向がありますが、日本には夏のイベントが比較的多いような気がします。猛暑にもかかわらず、大汗をかきながら神輿を担いで町を練り歩く人たちの姿が、毎週デジャブのようにニュースに報道されるたびに、私は「なぜ一番暑い時期に祭りを開催するんだろう」と疑問に思いました。

日本で開かれるお祭りは、季節ごとに異なる意味を持つと言われます。代表的な夏祭りとも言える京都の「祇園祭」や花火大会といった行事は疫病退散を祈り、亡くなった人の霊を慰める儀式から由来したものであり、「盆踊り」は「お盆」に先祖を供養するために踊る仏教の行事がその起源だと伝えられています。



「アナログ大国」という名に相応しく、日本各地で開催されるお祭りでは今も伝統が守られていました。約2時間にわたって行事が行われる間に生で演奏される祭囃子はもちろん、参加者たちの衣装や飾り、祭りに使用される道具には時代を遡ったような趣が際立っていました。さらに、どこかで行事がある日は多くの人が浴衣や甚平のような和服を着て歩き回るので、異邦人の私はこのようなことも日本のお祭りシーズンならではの風景の一つだと思いました。

◀「北海道神宮例祭(札幌まつり)」の華やかな山車

少なくとも私が今年の夏に経験した日本各地のお祭りは、単に食べて楽しんで、地域の経済を活性化させるために開催される町のイベントとは違うものでした。それは共同体を中心に生活していた社会の様子を再現するきっかけになると同時に、伝統を次の世代に継承する手段に近いようで、お祭りは地域の住民が団結する中心となり、街や商店街など人々が普段生活している場所が情熱的な祭りの舞台になるという共通点がありました。人気のトロット(韓国演歌)歌手の公演がお祭りのメインを飾り、のど自慢大会に参加した少数の人だけがスポットライトを浴びる一部の韓国の地域のお祭りとは違って、ここでは幅広い世代の人たちが祭りの主役を務めていました。さらに、パレードの行列には子どもを乗せたベビーカーや高齢者が座っている車いすが通るなど、社会的弱者に配慮した「バリアフリー」に対応したお祭りもありました。通行者や外国人観光客も一緒に掛け声をかけながら雰囲気盛り上げたり、隣の人と手をつないで盆踊りを踊るなど、みんなで楽しみを分かち合いながら一つになるお祭り会場の雰囲気はものすごく感動的でした。



▲小樽市内の商店街を練り歩く神輿行列



▲札幌市内で盆踊りを踊る人たち



▲いわみざわ百餅祭り



▲幼稚園児たちが製作した大型ねぶた(弘前ねぶたまつり)

去年の秋に見てきた「いわみざわ百餅祭り」は楽しい雰囲気さが記憶に残った地域の祭りの一つです。五穀豊穡と長寿を祈り、百人余りの参加希望者と百餅若衆が地元の特産品であるもち米を活用して世界最大級の大臼で餅をつき、その餅をお汁粉に入れて約1,200人の来場者に振る舞うこのお祭りは「地域固有の特色や伝統」とともに、「老若男女問わず参加できるエンターテインメント的要素」、「おもてなし」という三拍子揃ったイベントだと思いました。



▲会場に並ぶ屋台



▲全てのメニューがたった500円！



▲日本に上陸した韓国発祥のスイーツ

「花より団子」という言葉のように、お祭りには食べ物も欠かせません。野外イベントであることを考えると、お値段は通常より高めですが、どの地域の祭りに行っても食べ物の値段はあまり変わらないことがわかりました。販売されているすべての商品には値段がわかりやすく書いてあり、衛生的な面などからキャッシュレス決済を導入した屋台も多くて、安心して利用することができました。メニューの種類は、片手で持って食べられるおやつ(チョコバナナ、フランクフルト、かき氷、揚げ物類など)がメインで、たこ焼きや焼きそばも人気がありました。地酒や地元の名物を味わえる屋台も稀にありましたが、「フードマルシェ」や「ラーメンフェスティバル」のように美食をテーマとしたイベントでない限り、地域のお祭りでは値段が高いメニューや食事ができるほどボリューム感があるメニューを提供する屋台は見られませんでした。いくつかの祭りを回ってみて気づいた面白い事実は、韓国料理が人気を集めることになってから、日本では韓国式「チーズホットドッグ」や「10円パン(韓国の10ウォンパン)」が飛ぶよう売っていますが、10円パンの値段は、その名前とは違って500円ということです。



✓ 赤れんが通信
バックナンバーは
こちら



✓ 北海道庁
国際課
FACEBOOK



✓ 編集者・発行先 総合政策部 国際局 国際課
北海道札幌市中央区北3条西6丁目
TEL : +81-11-231-4111 FAX : +81-11-232-4303